

## 特別講演

# 「耳毒性の研究—過去, 現在, 未来—」

佐藤 喜一

金沢医大総合医研

内耳の機能の障害を及ぼす薬剤, すなわち耳毒性薬剤には AGs と Polypeptides 抗生物質や利尿剤, 抗腫瘍剤, あるいは鎮痛解熱剤など多種の薬剤があげられている。これらのうち, 今回は抗生物質による耳毒性の問題に限定し, これまでの研究の流れを復習しながら, これからの研究について展望した。

抗生物質で惹起される耳毒性に関する論文は莫大な数と言われている。もっとも早い論文は Waksman が SM を開発した翌年の1945年に Hinshaw と Feldman が報告したものである。すなわち SM は当時まで難治病であった結核の治療に大きく貢献したが, 使用した患者の中に平衡障害を訴える患者が見られた。

その後, SM は DHSM として再開発されたが, 前庭毒性が減少した代りに難聴, すなわち蝸牛毒性が発現するようになった。以来, KM で代表される AGs や CL のような Polypeptide 抗生物質を開発するためには, 前臨床の過程で耳毒性を検討する必要が生じてきた。その結果, この種の薬剤を使用した数多くの研究が生化学, 生理学, 形態学など各方面から進められてきた。そして耳毒性の詳細な病態像を解明し, また発症機序の研究では Schacht の説 (1979) を誕生させている。この間, 我国でも多くの耳鼻科医が貴重な研究を行ってきた。先人の輝かしい業績を紹介し未来への展望を口述した。